

令和7年度 江戸川区立東小岩学校 学校関係者評価報告書(学校経営計画・学校関係者評価シート)

学校教育目標	◎よく考える子 ○思いやりのある子 ○たくましい子	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	「夢や希望を育てる学び舎としての学校」 ・子ども自身の夢や希望、子どもにかける家庭や地域の夢や希望を育てる学校 ・子どもにとって通うのが楽しい学校(学校) ・「厳しく教え 温かく育てる」「信じて接し 愛して育てる」
前年度までの本校の現状	成果	課題	・運動への意欲を向上させ、体力を高める取組を進めること。 ・「誰一人取り残さない」授業改善を推進し、児童が自分の考えを表出する力を高めること。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己(学校)評価(A~D)		「中間」学校関係者評価(A~D)		「年度末」自己(学校)評価(A~D)		「年度末」学校関係者評価(A~D)		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力向上	授業改善の推進、学習の基礎となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	「誰一人取り残さないための学力向上に向けたアクションプラン」の実施・充実 「伝え合って考えを深めることができる児童の育成」を目指す。系統的な指導、活型の提示。	算数ベーシックドリル診断テスト正答率70%以上 国、区の学力調査におけるCD層36.5%以下	100%	90%	A	全国学力調査(6年)における本校児童のCD層の割合は国語33.9%算数32.1%であった。	A	基礎学力を徹底させることは、将来の学習に大いに役立つと思う。	A	区の学力調査における6年のCD層の割合は、国語37.8%、算数39.6%。4・5・6年ともに昨年後比べて国語・算数のD層が減少、国語のA層が大きく増加。	A	D層が減少し、A層の児童が増加することは理想的だと思う。日々の丁寧な授業づくりの成果だと思う。	よむYOMUワークシートや校内研究の成果の実践を進め、国語の読解力の伸びを他教科にも活かしていく。
	読書科の更なる充実	全学年で12時間を本を活用した調べ学習に設定し、探究的な学習を行い、「本を活用した調べ学習コンクール」へ応募する。	「本を活用した調べ学習コンクール」参加率100%	100%	100%	A	「本を活用した調べ学習コンクール」に参加することで、学年に応じた本を活用して調べ学習に親しむことができた。	A	自分で本を探して、読んで調べる経験は大切だと思います。	A	「本を活用した調べ学習コンクール」に積極的に理解する機会になった。	A	様々な資料に触れ、読み比べたりしながら興味を深められると良い。本を使って調べる経験を道して知る楽しさや味わう児童が増えることを願っている。	次年度は、教科横断的な興味を深められるような学習や総合的な学習の時間の探究的活動にも取り組む。
体力向上	「運動意欲の向上」に向けた取組の実施・充実	・「江戸川子なわ跳び出前授業」 ・アスリートを招いての出前授業の実施	「運動することが楽しいですか?」に対する肯定的評価80%以上	90%	85%	A	「運動が好きですか」に対する肯定的な回答は約95%。アスリートを招いての出前授業を全学年で実施した。	A	体力の向上にアスリートの出前授業は大変効果的であると思う。運動が苦手な子ども楽しさを体験できる。	B	「運動が好きですか」に対する肯定的な回答が約95%。一方、「校庭ではよく運動しましたか」の質問には74%だった。外遊びの日常化が課題。	A	積極的に運動をすることで楽しさを感じてほしい。運動が苦手な子ども楽しい気持ちで取り組めるような体験を積んで行けると良いと思う。	休み時間に日常的に取り組める遊具の確保、校庭や体育館に設置するなどの工夫を継続していく。
	悩みに応じた体力向上のための取組の実施・充実	・年3回のなわとびウィークの確実な実施 ・校庭に体力向上のための取組が日常的にできる器具等の設置。	「体力を高めようとしている」の肯定的回答が80%以上。	100%	100%	A	「体力を高めようとしている」の肯定的回答が83%。	A	競い合う場面時には必要だと思う。マラソンの取組を検討してはどうか。	A	85%の児童がなわとびウィークの活動が「楽しかった」と回答した。3学期には、体育の時間に持久走の取組を全校で実施した。	A	なわとびや持久走など、楽しみながら体を動かせるものがあると良い。運動能力が伸びると感じることもあるので選べる中に取り入れて体を動かしてほしい。	冬季の持久走の取組を今後も継続する。
教育の推進	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた取組の実施・充実	特別支援教育コーディネーターが中心になり管理職、心理士、SC、巡回指導教員の連携のもと、特別支援教育を進める。	特別支援打合せを毎月1回実施する。 特別支援研修会を年3回実施する。	70%	85%	B	特別支援打ち合わせを毎月実施し個に応じた指導の充実を図っている。特支コーディネーターを中心とした連携が円滑に行われている。	B	子どもファーストの取組が良いと思う。より良い連携によって小さな問題も見逃さず、共有しながら解決を目指すしてほしい。	B	連携機関から講師を招いて特別支援研修会を実施した。研修を通して職員の間での意識を高めることができた。	A	児童にとっていろいろな方面からのアドバイスもとても良い。情報の共有は大変だと思うので教職員の連携をさらに進めてほしい。安心して学べる環境づくりが続いている。	特別支援コーディネーターを中心として、全児童を全員で支援する体制を継続する。
不登校・充実に対応	豊かな心の育成	いじめアンケートを実施し、早期発見と早期解決を図る。	週に1回、全職員からの報告を行う。各学期に1回いじめアンケートを行い、いじめによる不登校を0にする。	100%	100%	A	「いじめ対応研修」を実施し、早期発見、早期解決に向けて情報の共有や記録が適切に行えるように意識を高めている。今後も継続する。	A	いじめは、早期に気付くことで解決できることが多いので今後も取り組みを強化してほしい。	A	年3回のアンケートをはじめとして、早期発見・対応を促したい。いじめによる不登校は0であった。	A	いじめによる不登校がなく、日頃から丁寧に接していることが伝わる。さいごにでも担任に気づいてもらえるのは、保護者の声は学校側は大変だと思う。学校だけでなく家庭とも連携して対応が必要があると思う。	早期発見、早期対応をするための校内体制を今後も全教職員で継続する。
	L-Gateの活用	L-Gateの児童の実態把握に基づいた指導の推進	毎日の振り返りを担任が確認し、児童の変化を見取り、早期発見につなげる。	70%	70%	B	毎日の振り返りの会などでL-Gateを通した振り返りを行っている。今後も児童の変化を見逃さないようにしていきたい。	B	小さなサインを見逃さない取組によってよい状況が続いていることを願っている。手軽に利用できる手段は良いと思う。	B	毎日の振り返りで児童のちょっとした変化に気付くようになった。高学年の児童で、入力を忘れてしまうことがあった。	B	毎日の振り返りで小さな変化にも気付いている点が良い。いじめはあつてはならないので、大事にならないように対応していただきたい。	毎日の振り返りに実施するまで時間を決めて、全員が確実に入力できるように習慣づける。
学校へ開かれた地域社会の実現	学校(園)ホームページの充実等	学校ホームページにて情報を発信し、保護者、地域との連携を図る。	週1回以上、学校ホームページの更新を行う。	100%	100%	A	校務分掌や各学年の担当ごとに、学校行事や学習の様子をホームページで発信することができた。(1学期終了時69回更新)	A	HPは「生」の情報をリアルタイムで発信することが望ましいので今後も期待している。	A	昨年同様ホームページの更新を週平均4回更新し、学校の様子を地域や保護者に伝えることができた。	A	こまめな更新で学校の様子がよく伝わり、HPの更新は大変だと思う。学校の様子を伝えることでも良いツールとして充実させてほしい。	学校ホームページの更新を今後も継続してさらに充実させていく。
	学校関係者評価の充実	学校公開時にアンケートを実施し、授業改善につなげる。 学校評議員会で学校の取り組みへの評価、検討を行う。	保護者アンケートの肯定的意見を80%以上にする。	100%	100%	A	現在まで学校公開や運動会後のアンケートでは90%の肯定的意見をいただいている。	A	学校と保護者が同じ気持ちで取り組んでいる証だと思う。	A	保護者アンケートの全ての項目で、肯定的意見が80%以上であった。	A	保護者の肯定的な声が多く、学校の信頼が厚い。協力し合う関係が築かれていると感じる。今後もより良い学校の在り方を考えていきたい。	学校評議員や地域・保護者の評価をもとに客観的な視点からの改善を生かす。
教育特色の展開	「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	「学校における働き方改革プラン」に基づき、学校業務の適正化を行う。	月の時間外勤務が4.5時間を超える教員を0にする。	70%		B	今後も「学校における働き方改革プラン」に基づき、学校業務の適正化を図っていく。	B	教員の仕事量が多く、大変だと思うですががんばっていただきたい。体調管理には十分気を付けていただきたい。	B	月の時間外勤務が45時間超となった教員が12月には、4・5・6・10・11・12月にあり、3~8名の人数だった。	B	忙しい中でも工夫して取り組んでいる様子が伝わる。教職員が無理なく働ける環境づくりが進むことを願う。	全職員のライフ・ワーク・バランスを確立を目指す業務改善や効率化を進める。
	児童が自ら進んで挨拶できるようにする指導の充実	地域と連携した「あいさつ標語コンクール」に取り組み、意識を高める。 白旗から教職員が率先して挨拶を行い範を示すことで児童の意識を高める。	あいさつ標語の作成に、全ての児童が参加する。 児童アンケートで、「すすんで挨拶をすることができた」という肯定的な回答率を80%以上にする。	75%	100%	B	全児童が「あいさつ標語コンクール」に参加した。日頃からあいさつへの意識が高まる取り組みを行っている。	B	街中であいさつしてくれる機会が多かった。「あいさつ標語」では、子どもたち積極的な意識を楽しくしている。あいさつへのハードルが低くなることを願っている。	A	児童アンケートで、「すすんで挨拶をすることができた」という肯定的な回答率は90%。保護者アンケートで、「お子さんは、きちんとあいさつをしていると思いますか」の質問への肯定的な回答は85%であった。	B	昨今あいさつと危険が隣重という部分がある。子どもも戸惑っているのではない。	地域に根ざした人づくりのため、「あいさつ標語コンクール」「街角チャレンジ」「ふるさと(岩を見つめ未来へつなぐ)」の取り組みを今後も継続・発展させる。
	ふき農園での栽培活動	3・4年生が農園での栽培活動を通して豊かな心を育てるとともに、地域の方々との繋がりに感謝する。	ふき農園での栽培活動等を通して、「栽培や収穫の喜び」や「お世話になった地域の皆様への感謝」を感じたという感想をもった児童90%以上	85%	100%	B	秋の収穫に向けて継続して準備を進めている。児童は悪天候でも学校の活動に協力して下さる地域の方々への感謝の気持ちももっている。	B	自分たちの手で収穫する喜びと、地域の方々への感謝の気持ちを育むことができるふき農園の活動はとても素晴らしい活動だと思う。	A	収穫した作物を調理し、学校応援団の方々へ届けた。感謝の気持ちを児童が直接届けることができた。	A	動植物を育てることは大変だが、楽しいと感じてほしい。また、収穫を通して喜びや感謝の気持ちを育ててほしい。地域の方々の交流が子どもたちの成長につながっていると嬉しい。	土との触れ合いの経験や地域の方々との交流の機会を今後も大切にしていく。